

「トルストイ民話集 イワンのばか」

トルストイ(著) 中村白葉(訳)

岩波文庫 1932年9月25日刊

トルストイの作品といえば『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』などの長編大作を思い浮かべる方も多いかもしれないが、ロシア民話に題材を取った晩年の短編こそがトルストイ芸術の集大成だと主張する人も少なくない。例えば、作家ロマン・ロランは「これは近代芸術における唯一無二の作品である」と絶賛している。我が国へのトルストイの影響も大きく、中でも、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎らは「白樺派」を主宰し、トルストイが描いているような理想郷を九州日向に「新しき村」として実現しようとさえしたのである。また宮沢賢治の童話にもトルストイの影響が強く見られる。

本書の内容は次のようなものである。軍人セーミョン、商人タラス、農民イワンの3兄弟に対して悪魔がちょっかいを出し、軍人は隣国を攻撃し逆に滅ぼされ、商人は金の亡者となりモノを買いあさるが、バブル経済の中で、すべてを失ってしまう。農民の「イワンのばか」だけは頑として悪魔の罠にかからず、実直に労働を続け、頭を使って働くべきだという悪魔を逆に退治してしまうということである。

本書が書かれたのは1885年であるから、20世紀に人類が経験した悲惨な戦争や経済恐慌をトルストイは知る由もなかったが、本書で描かれている拡張的軍事情動や悪魔によって金貨が乱発される場面は今も続く地域戦争やバブル経済と重ねて論じることが可能である。逆に言えば、本書で扱われている戦争と平和の問題、労働という実体によって支えられていない小賢しい金儲けを助長する貨幣経済の問題、質実で慎み深く、感謝を忘れない魂のあり方などは、いつの時代にも当てはまる人間社会の本質であるというのが、トルストイが最終的にたどり着いたメッセージなのである。また手にたごができるような労働こそが最も尊いというトルストイの思想は反知性主義と捉えるのではなく、心と体と知性のバランスが大切であり、金を右から左に動かすだけで不労所得を得るようなことは好ましくないという意志表示であると考えたい。

登場人物である「イワンのばか」とその狡猾な兄弟の話はロシア民話にあったものとはいえ、トルストイが若い頃に書いた数千頁におよぶ大河小説何冊分にも相当する内容を僅か54頁の短編に手際よく凝縮し、子供から老人まで誰でも読めるように平易に書いたものであって、その手腕は見事としか言いようがない。